

69

## 華岡家へ入門した門人たち

—2200人を上回るわが国最大の医学塾—

梶谷 光弘

島根大学医学部

平成24年(2012)9月、著者は華岡慶一氏(9代随賢)が所蔵される「四海門□□<sup>(次)</sup>」を手にとって驚いた。そこには「文政十二己丑仲冬十一日 水府 林友輔 江戸木場二丁目 請人升屋平兵衛」から「明治十五年五月廿七日 和歌山県紀伊国和歌山区湊西組材木丁四拾六番地 小山田竹次郎 二十六歳 右請人華岡新兵衛」まで、門人がびっしりと記載されている。その数は「再来」した2人を重複して数えて1,163人。そして、そこに記載された入門年月日、入門した塾、出身、氏名、請人などは、これまでに公表された年次順門人録「門人録」(高橋克伸)とまったく同じ形式である。これこそ、年次順門人録「門人録」の後編に間違いないと確信した。

大正9年(1920)3月、呉秀三氏は、「華岡青洲先生伝」の中で天明8年(1788)から明治15年(1882)までの年度別門人数を示した。その総数は2,021人を数えた。その後、『華岡青洲先生及其外科』の中でそれを掲載するとともに「華岡青洲先生春林軒門人録」を公表したが、幕末から明治15年までの門人は公表しなかった。

こうして、華岡家の門人は、全貌が解明されないまま現在に至っているのである。

今回、著者は華岡慶一氏から「四海門□□」の公表についてご理解を得た。

そこで、これまで華岡家本家に所蔵されていた「稚府春林軒 門人姓名録」1冊、「青洲華岡先生門人姓名録」1冊、「門人録」1冊とこの新出史料「四海門□□」1冊、華岡家分家に所蔵されていた「華岡門人録」1冊により門人を精査した。その結果、華岡家門人は、安永9年(1780)から明治15年(1882)まで、「再来」「再遊」を含め延べ2,246人であった。

一方、これまでに公表されている「華岡青洲先生春林軒門人録」(呉秀三)、「華岡医塾門人録」(森慶三・市原硬・竹林弘)、「華岡門人姓名録」(高橋克伸)、「青洲華岡先生門人姓名録」(梶谷光弘)と比較すると、新たに11人を加えるのみであった。

次に、華岡家所蔵門人録に記載された2,246人、それ以外の門人録に記載された11人、華岡家門人2,257人を分析すると、次の点が明らかになった。

- ①華岡家の門人録への記載は、華岡直道の時代に始まり、青洲、鷺洲、厚堂の4代、103年間にわたって続けられた。そして、その医塾としての機能は、最後の門人を受け入れて2ヶ月後の7月24日、厚堂が40歳の若さで亡くなる時をもって終焉を迎えたと考えられる。
- ②華岡青洲が亡くなった天保6年(1835)10月2日を基点にして、安永9年(1780)からそれまでの56年間と、それから最後の明治15年(1882)までの47年間の門人を比較すると、没後門人が40数人多い。
- ③華岡家の主宰者別に門人数を算出すると、青洲が1,103人(48.9%)、鷺洲が919人(40.7%)となり、華岡家の医塾は青洲と鷺洲の時代が門人全体の約90%を占めていた。
- ④文化3年(1806)から入門する門人が増加し、文化8年(1811)から文政10年(1827)までの17年間は、毎年30人以上が入門した。とくに文化12年(1815)から文政元年(1818)にかけての4年間と、文政9年(1826)は、年間の入門者が50人を超えた。
- ⑤青洲が没し、鷺洲が主宰してからも年間の入門者はほぼ20人以上を維持し、とくに安政4年(1857)は50人を超えた。そして、鷺洲が没して厚堂が主宰してから3年間は30人以上の入門があった。ところが、明治4年(1871)を契機にして、華岡家へ入門する門人は急減した。